

●1993-94

オウム全速力修行モードに恐れをなした私は、また以前のように幽霊信徒に戻ればいかに考えて、道場に行くことをやめた。そのころロシアから連れてきたキーレーンとかいうオーケストラのコンサートを2度観にあって、それがオウムと関わった最後の活動だったと思う。ところが、こちらが距離をとろうと思っても、向こうは信徒一丸となって全速力になろうとしているのだから、ほっとしてもらえなくなる。年の前半は月一回くらい電話がかかってくるだけでそれほど気にならなかったのだけど、夏を過ぎたあたりから電話は毎週、月に一遍は訪問してくるようになってきて、それだけでえらいプレッシャーになった。とくに訪問されたりすると、こちらが居留守を使っていたとしてもかなり長時間ドアの外にねばっていて、となり近所のことを考えるとかなりまいった。まいったことはまいったが、そうするのは私がオウムの信徒である以上、当然のことだと思っていた。しかし、そうすると今までのようなぬるい、心地よい距離のままの信徒ではいられない。ハルマゲドン理由にしてでは、バリバリ修行する気にもなれない。修行しなさい攻勢が激しくなるにつれ、私としては信徒をやめる方向に傾いていった。やめるとは言っても、まともに「やめます」といったって簡単に済むわけがないのは分かりきっている。真理と離れてしまうんですよ、とか、来世は三悪趣ですよ、とか、悪くするとアーナンダ師とかサクラ正悟師のところに行きましょう、とか言われるだろう。そこまで大ごとになされてなお「やめます」といえる自信はない。ちょうどそのころ、住みはじめて5年半になる、陽のあたらない四畳半の汚い部屋から引っ越したいと思っていたところだったので、2週間ほどで新しい部屋を決め引っ越しも済ませ、これでオウムとの関係は実質的には切れた。まさか、次の住処まで追っかけてくることもないだろうと、住民票も移したし、前の大家にも住所は教えていった。それまでレンタル電話だったのを解約し、加入権を買ったことから電話から引っ越し先が見つかることもなかった。

この年には払い込むべき月会費を払い込んだ覚えがないのに、オウムから送られてくる機関誌やお知らせが入ってくる封筒には、翌年5月までの会費が収められていることになっていて、それがどうしてなのかははっきりしないのだが、確かこのころシステムの変更があって月の会費が千円になったとかいうのをどこかで読んだ記憶がかすかにあるから、前の年に払い込んだ一万八千円が先延ばしにでもなっていたのだろう。

翌94年の5月に、教団機関誌が郵便局からの転送で送られてきたのを最後に、麻原がなにを言っていて、オウムがどういう状態であるのか知ることが出来なくなった。それでも、カルマの法則は存在し我々はカルマによって生まれ変わりそのつど苦しみを味わい、そして麻原はその苦しみの世界から抜け出させてくれる法を授けてくれている、という信仰までは捨てなかった。この先、ハルマゲドンがくるとされている時期を過ぎてもなにもおこらず、そうした場合「麻原は嘘つきだ」ということで教勢が削がれるときがくるかもしれないし、そういうときがきたら自分は戻ろう、なんてことも考えていた。

夏に、長野松本で謎の毒ガス発生、というニュースを耳にしたときは、すぐにオウムと関係しているのではないかと考えた。もちろんオウムの犯行だと思ったわけではなく、教団機関誌にも度々書かれていた、オウムに対して毒ガス攻撃をしている何者かが姿をあらわしつつあるんじゃないかと思ったのである。しかし、このような異常な事態が実際に世間を騒がすようになってもお、私はハルマゲドンはおこるかもしれないしおこらないかもしれないという気分でした。現世的な生活をそこそ楽しんでいるところからくる、多分に希望的な思いもあったかもしれない。そのせいか、犯人が近所

の会社員だと見られるようになると、やはりなにも変わったことは起きなさそうだ、安心するところもあった。

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) 5 [6](#)